

神さまのハグ

[ヨハネの手紙一 1章 1～10節]

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。——この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。——わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。わたしたちがイエスから既に聞いていて、あなたがたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くないということです。わたしたちが、神との交わりを持っていると言いながら、闇の中を歩むなら、それはうそをついているのであり、真理を行ってはいません。しかし、神が光の中におられるように、わたしたちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にありません。自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます。罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであり、神の言葉はわたしたちの内にありません。

[1] 信仰は、言葉では伝わらない

自分が与えられている信仰のことを語るというのはなかなか難しいことですよ。皆さんもそう思うことがあると思います。私自身もそうです。いや、信仰の世界のことを言葉で語る（説明する）ということには出来ないのではないかと最近よく思うのです。教会の礼拝説教も、私は最近、説教とは何かが分らなくなってきた感じなのです。というのは、説教というのは、聖書の講義とか解説ではないと思うのです。信仰というのは霊的なことですから、説教者の「言葉」が、皆さんの信仰の養いにとって、うるさい言葉や邪魔な言葉になるならば、それは無い方がよいのです。（み言葉だけ聞く方がどれだけ良いことかと思うことも多いのです。その意味でも「み言葉を思い巡らす」時間は大事だと思います）。

今月6月は、「ヨハネの手紙一」と呼ばれている手紙をご一緒に味わいます。み言葉は、み言葉自身が光を放って（詩編 119:130）読む人の心に語りかけてく

れます。全部でもそれほど長いものではありませんから、是非ご自宅で繰り返し読んで下さることをお勧め致します。素晴らしいみ言葉が宝石のように沢山あります。み言葉との出会いというのは、沈黙の中でこそ起こると思います。では私の役割とは何なのかと改めて考えてみました。そこで思ったことは、私なりのこれらのみ言葉から聞いたことを、皆さんと一緒に神様と交わるその一助となることを祈り求めて語ることもかな、ということです。あまり肩の力を張らないでお聞き頂ければと思いますし、私もそのようにお話し出来たらと思います。

〔2〕 喜びが満ちあふれるように

この「ヨハネの手紙」と言われるものが書かれたのは大体紀元 90 年頃であるようです。書いた人（複数かもしれませんが）、その当時の事情を念頭にしながらこのメッセージを書いたのでしょう。では、この手紙の作者（一応この教会のリーダーのヨハネとします）は、読む者に何を伝えたいと思っているのか。

出だしがとても印象的です。これは私の印象ですが、何かとても高い山の上から、新しく開かれた世界を眺望しているかのような大きなスケールでまず語っているなと思いました。「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について」。—この命について語りたいということが分かります。ただ、詩的な表現でもあり、今一つよく分からない言葉です。けれども続けてこう言います。—「この命は現れました」と。直前まで「命の言葉」という抽象的なことが、実は「現れた」、リアルなものになったと言っている訳ですね。「リアル」の反対は何でしょうか。最近よく使われる言葉で言うと「ヴァーチャル」（仮想）とも言えますね。つまり、ヴァーチャルではない、まして、空想でもお伽噺でもない命が現れました！ そのことを教会の人よ、忘れないで下さいとヨハネは語っているのだと思います。

ヴァーチャルではない命、リアルな命、変な言い方ですけども、命ある命をあなたがたは得ているはずでしょう、それなのに（この後で語られていますが）、あなたが闇の中に歩くなら、この命を無駄にしていることになってしまわないですか、と祈りと痛みをもって訴えているのだと思います。ではその命の実態とは何なのか。もう少し読んで見たいと思います。2 節から 4 節—「この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。——わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。」

「**交わり**」という言葉が3度出てきます。「命」と「交わり」が結びついています。どうでしょうか？私たちは命というと、この自分の命のことを考えます。一つしかない命、その意味で、かけがえのない命、命の尊さ、というように、この私という単独の命。一けれども「命」というものは、実は「**関係性**」の中にあるのだということを私はここを読んでいて思わされました。

実は「**命**」というものは**単独では存在出来ない**のではないのでしょうか？ 関わり合いの中で今の命があるということ。「**環境問題**」という言葉がりますけれども、あれも言い換えれば「**命の連鎖・関わり合い**」の問題なのだと思います（生態系）。それと同じように、いや、それ以上に、私たちは「**交わり**」の存在としてこの世に命を送られているのでしょうかね。皆さんお一人ひとりの命も、私の命も、男性と女性の両者の間から生まれたように、「よし、これから生れるぞ」と言って生まれたわけではありませんよね。そしてその子の親だって、子供誕生の時は本当に神聖な思いになる、正に天から送られてきたとしか言えないような感動に震えるのではないのでしょうか。この手紙の著者ヨハネも言うのですね。私たちは「**交わり**」の中に生まれ、また「**交わり**」を目指して生きている存在だと。そして、その私たちの交わりとは、「**御父と御子イエス・キリストとの交わりです。わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです**」と。ヨハネは、御父と御子イエス・キリストとの交わりこそが、わたしたちの喜びが満ちあふれさせるもの（他の訳では「**喜びが全きものとなる**」）なのだと書いています。これは、私たちは教会に来るまで、聖書に触れるまで、知らなかったこと、知らなかった幸いです。でもそれが「**現れました**」とヨハネは語っているのですね。

[3] 「**抱く**」というリアルがここにある

5節以降の言葉は、何か責められているように聞こえるかもしれません。6節に「**もし闇の中を歩むならそれはうそをついている**」とか、8節「**自分に罪がないと言うなら、自らを欺いている**」とか、さらに10節「**罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とすることだ**」と、容赦のない言葉が語られています。しかしこれは責めているのではなく、「**帰っていらっしやい**」という愛の呼びかけのように聞こえて来ないのでしょうか。ヨハネが一見厳しい言葉を語っているのは、**イエス様の出来事が本当にリアルだから**です。「**初めからあったもの**」が肉体となり、声となり、また霊なるお方として私たちと共におられるということですね。見えないからと言って、非現実なのではない。私は最近本当にそう思うのですが、あの**放蕩息子の帰還**の時、いてもたってもいられず走り寄って息子の首を抱いて（ハグをし

て) 接吻し、祝宴を開いたとありますけれども (ルカ 15 章)、あれこそが**十字架の主イエス様**のリアルなのだと語っているように思いました。今日の箇所、7 節にこうあります。「しかし、神が光の中におられるように、わたしたちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます」。9 節の言葉も素晴らしいお約束です。「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます」。これに私たちはアーメンと言える。

私は週報にも書いたのですが、1 才になったばかりの小さい女の子の孫の姿を見ていると、本当に命の不思議を思うのです。本人は自覚はないと思うのですが、本当に命を喜んでいることが分かります。楽しそうなのです。でもそれは、そこに母親を初め、愛を注ぐ存在があるからでしょう。それを疑わない幸いの中に生かされている。その赤ちゃんを抱っこすると、赤ちゃんも時々その小さな腕で大人を抱いてくれますね。私たちが赤ちゃんを抱くと、赤ちゃんも私たちをハグしてくれる。これは凄いことだなあと私は感動しているんです。赤ちゃんは神様の使いなのかもしれないと思いました。私たちがどんなに闇に中にいるような大人であっても、或いは自分は独りで生きているのだ、俺はそんなに弱い存在ではないと粹がっても、神様は私たちをあるがまま抱いて下さるんです。「帰っていらっしやい」、命の源である私のもとに戻っていらっしやいと。健康な人には医者はいらない。私に来たのは、病人を招くため、罪人を愛するためなのだ、とイエス様はおっしゃいました。本当にそうです。この**イエス様との交わりの中に、私たちの本当の居場所がある**のです。さあ、これから**主の晩餐式**も行います。主のご愛を、心と、そして体でも受け止めましょう。この晩餐式は、主が両腕を広げて私たちを抱きとめてくれる祝宴でもあります。ご一緒に与りましょう。

お祈り致します。